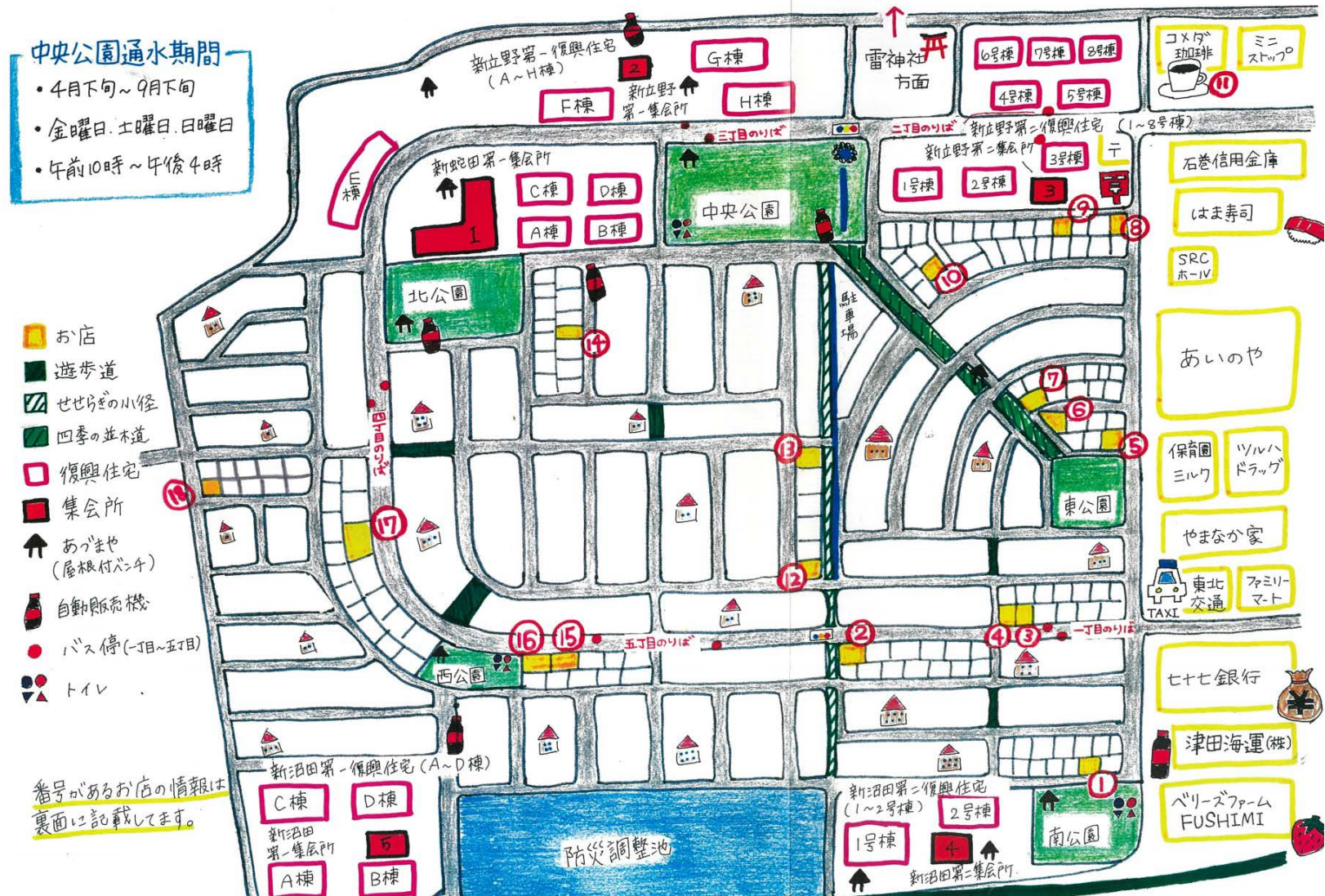


令和2年度「新しい東北」官民連携推進協議会 宮城県 実践の場 まちづくり分野 のぞみ野地区資料



● 1. 取組みの紹介

設立の経緯と目的

- ・2012年 市内最大の大規模集団移転地「新蛇田地区」として整備開始。(1260世帯、内533戸が公営住宅)
- ・2015年4月 災害公営住宅を皮切りに住民の入居が開始。
- ・2016年5月 8つの災害公営住宅団地会の連絡組織として「新蛇田第一集会所運営委員会」が設立。
- ・2017年～2018年 4つの町内会が設立。
- ・2018年6月 運営委員会を4町内会と3団地会の運営組織として再編。
- ・2018年夏 4町内会の連絡会議が開始
- ・2020年3月 3つの団地会が、のぞみ野第行政区域へ合流
- ・2020年7月 運営委員会を4つの町内会の連絡組織として再編し、町内会連絡会と統合

取組み内容

- ・集会所の維持管理費の負担割合と徴収方法のルール化。
- ・運営委員会と町内会連絡会の統合とルール整備
- ・地域の季節行事での連携（盆踊り大会の事務局機能）
- ・地区内の遊歩道や公園の一斉清掃。
- ・防災訓練を複数組織で合同実施（2017年より毎年）
- ・自主防災組織を勉強する勉強会を実施（2019年）
- ・我が家の災害対応ワークショップを町内会役員向けに実施

子どもを交えた防災講話の様子



新市街地の周辺地図



新市街地の防災に取り組むワケ

- ・あゆみ野地区とのおぞみ野地区で人口は5,000人
- ・近隣の避難施設は2箇所
(蛇田中学校と三陸道の避難階段)
- ・生活避難所の蛇田中学校のキャパは1,000人ほど
- ・防災設備も地区内にあるが、住民の認知度は低い



- ・現在ある避難計画、防災計画はアテにならない。
- ・防災設備も使えるものと使えないものがある。

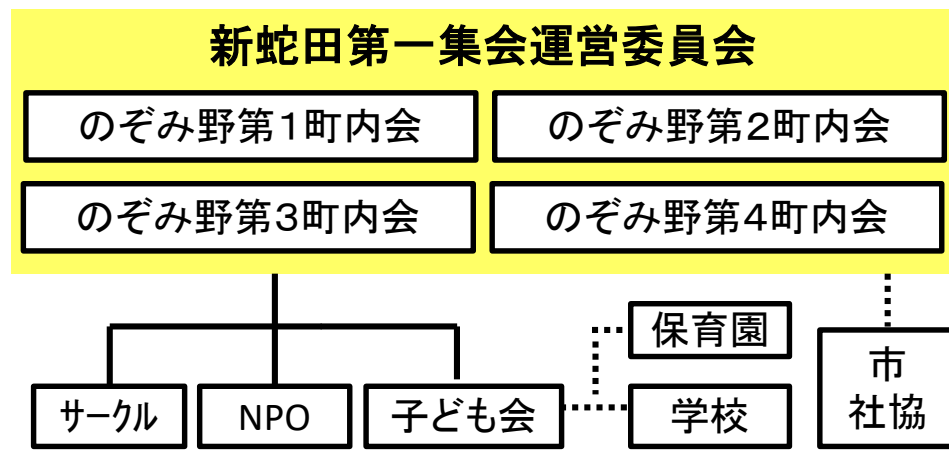


● 2. 何が生まれた？なぜできた？

こんないいことがあった（成果）

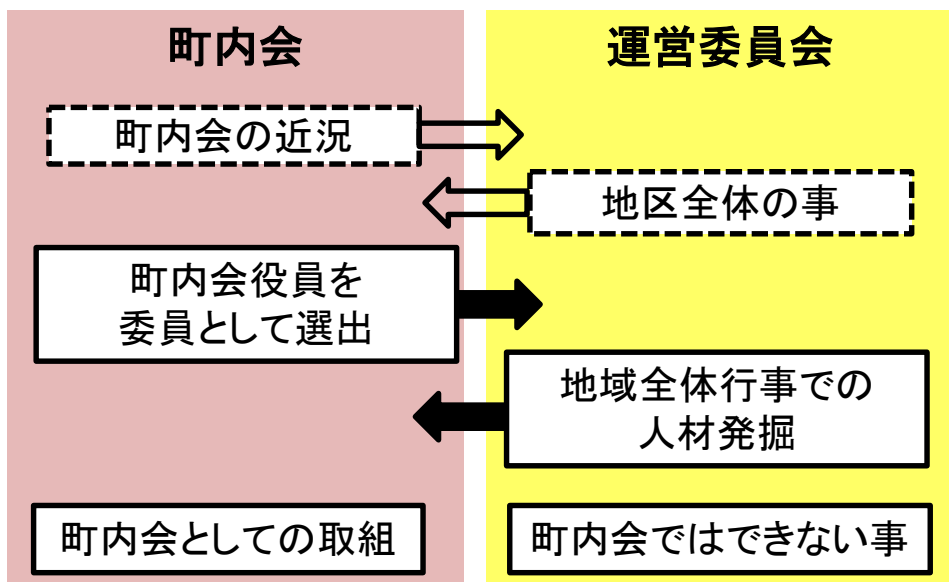
- ・補助金ベースではなく自己負担する仕組みを作り、地域全体の連携による事業の実施ができた。（防災訓練や盆踊り大会など。）
- ・単独の町内会で行うところが難しい所を共有し、協力することで行えるようになった。（子ども会設立など。）
- ・事業の際にNPO等と連携、協力体制ができた。

連携の体制・関係者



なぜ実現できたか？ 工夫や得た教訓・ノウハウ

- ・地区内唯一の大きな集会所がであったため共有施設としての維持管理を考えざるを得なかった。
- ・町内会で行う取組と、町内会単位ではできない事を区別し、全体として取り組むように分担ができた。（例 子ども会の設立：町内会単位での設立が難航しのぞみ野全体で一つ作ることになり、令和元年設立）子ども分野に強いキーマンが中心となった。
- ・定例会議にNPO等が参加できるようにしている。



● 3. これからのこと

継続のために工夫していること

・各町内会複数人が会議に関われるように →令和2年度より委員会委員の選任方法を変えた。
(町内会長の負担軽減と、正確な双方向の情報伝達、多様な意見交換のために)

・会議の段階からNPOや社協などが参加している
→防災訓練や季節行事でコラボが生まれる。

※左写真 NPO・保育園と合同の秋祭り
子どもが集まり、親が集まり、賑わいに人が集まり、
かつてない賑わいができた。

※右写真 防災訓練に参加するNPO



課題とその解決の目安（あれば）

活動資金等の確保

多くの補助金等が町内会を相手にしており、運営委員会はそういった補助金をえられない。

→合同行事の際などの金銭負担のルール化

近隣地域との連携

→隣接する集団移転地「あゆみ野」（新蛇田南地区：約850世帯／3つの町内会が2019年春に設立）との連携会議

現在の避難計画などが地域の人口動態とあっていない。

→住民主導の新しい地域防災計画の策定

- ・地域の避難計画の見直しや自主防災組織の設立と組織間の連携。
- ・大規模災害の際に避難者を受け入れる地域としての体制整備。

● 4. さいごに

この10年を踏まえて、全国に伝えたいこと

のぞみ野は災害によって様々な地区から来た人が同じ街に暮らすようになりました。以前いた地区の伝統や取組、そこで得た経験は財産です。しかし皆が以前と同じやり方をしては衝突を生みます。前にいた街の「財産」を持ちより、あたらしい街ではどうしたいと考えてみるのが大切です。場所も、暮らす人も違えばやり方も違う。

「違い」を認識し「違い」を尊重することが「ともに暮らす」スタートだと思いました。

「まちづくり」にゴールはなく、変化しつづけていくものだと思います。わたしたちのまちの誕生のきっかけは災害でしたが、これからは全国各地のまちと時代や世代の変化にもまれながら、学び合い切磋琢磨していきましょう。

